

# メキシコからアメリカ合衆国への移民

## —ユカタン州の事例にみる出身地と移住先を結ぶネットワーク—

渡辺 暁

### はじめに

2000年に映画「アモーレス・ペロス」(*Amores Perros*)で鮮烈なデビューを飾り、日本では「バベル」などの作品で知られるメキシコ人映画監督アレハンドロ・ゴンサレス＝イニャリトゥ(Alejandro González Iñárritu)は、2015年、「バードマン」でついにアカデミー賞監督賞を受賞した。オスカー像を手にしたゴンサレス＝イニャリトゥ監督は、受賞スピーチのなかで次のように述べた。

「私はこの賞をメキシコの同胞たちに捧げます。メキシコに住んでいる人たち(…)。そしてこの国(米国：筆者注)の最も新しい移民集団の一つであるメキシコ人たち。そのアメリカに住むメキシコ人たちが、彼らより前にこの地にやってきて、この偉大な移民の国を作った人々と、同様の尊厳と敬意をもって扱われることを、私は祈っています。<sup>(1)</sup>」

このゴンサレス＝イニャリトゥの言葉が雄弁に語るように、メキシコ系の移民はいまや米国で最大の移民集団であり、米国の社会・経済・文化にとって切り離せない存在となっている。カリフォルニアの農場で野菜や果物を収穫している人たち、毎朝同じ街角に立って建設現場の仕事にありつくのを待っている人たち、中流家庭の住む住宅街で家事を手伝う女性や庭を手入れする人たち、ニューヨークのデリで表にリンゴを並べている人たち、街角の普通のレストランで皿を洗ったり、

ハンバーガーを焼いたりしている人たち、食肉工場で鶏をさばき、冷凍食品やファーストフード向けの製品に加工する人たち、そして、英西2か国語を駆使し、ビジネスの世界で、あるいは専門職に就いて活躍している人たち<sup>(2)</sup>。メキシコからの移民に、何らかの形で世話になったことのない米国在住者は皆無である、といっても差し支えないだろう。

メキシコ生まれで米国に住む人の数は、1970年には76万人と見積もられていたが、1990年には450万人へと急増した。1990年代から2000年代にかけて移民の数はさらに増え続け、2010年には1238万人に達したとみられている。しかも、そのうち半数以上の650万人は、正規の手続きを経ずに入国したり、オーバーステイでアメリカに残った、いわゆる不法移民<sup>(3)</sup>であると考えられている(Passel, Cohn and Gonzalez-Barrera [2012: tables A1, A2, A3])。ちなみに2010年のメキシコの人口は約1億1000万人<sup>(4)</sup>、同じく2010年のアメリカのセンサスにおける「メキシコ系」(メキシコからの移住者およびその子孫で、自分をメキシコ系であると規定する人)の数は3180万人であった(Ennis et al. [2011])。これらの数字をみても、メキシコから米国への移民がいかに大きな人の流れであったかがわかるだろう。

なお、2008年のリーマンショック以降、メキシコから米国への移民の流れは鈍化し、強制送還

の増加もあって、メキシコ生まれの米国在住者の数は2009年頃をピークに少しずつ減少しつつある。最新の2012年時点での推計によれば、その数は1149万人（Brown and Patten [2014: Table 4]）、そのうちいわゆる不法移民は590万人と推計される（Krogstad and Passel [2014]）。

本稿では、1970年頃から2000年代にかけてのメキシコから米国への移民の急増という現象を、主としてミクロの視点から考えていきたい。事例として取り上げるのは、筆者が2000年から断続的にフィールドワークを行ってきたユカタン州ペト市から、カリフォルニア州サンラファエル市への移民である。この町からの移民は、1980年頃に非常に特殊な事情から始まり、正確な数字はわからないものの、最盛期のリーマンショック直前には5000人（人口の約4分の1）もの人々が米国に移民していたと考えられている。そうした人々の移民の様子を描写することで、統計の数字の後ろに隠された彼らの生活、そして彼らの移民という経験との関わりについて紹介していきたい。

まずⅠ節では、この時期の移民の急増を統計資料で確認し、その要因を分析した先行研究を紹介する。Ⅱ節では、筆者のフィールドワークから得られた知見を中心に、こうした統計データの背後にある、移民たちの実際の行動について記述する。筆者が調査を行っているユカタン州は、もともと米国への移民の多い地域ではなかったが、それでもかなり多くの人々が移民という選択をしてきた。このユカタン州での調査、そしてカリフォルニアでのユカタン出身者への聞き取りをもとに、彼らが移民していったプロセスや生活の実態、そして移民という経験が彼らに与えた影響について考察していく。最後にⅢ節では、リーマンショック後の状況、そしてオバマ大統領の移民制度改革のもたらし得る影響について、移民の目線から検

討していく。

## I 1970年代以降のメキシコ系移民の急増とその背景

### 1 データから見る移民の急増

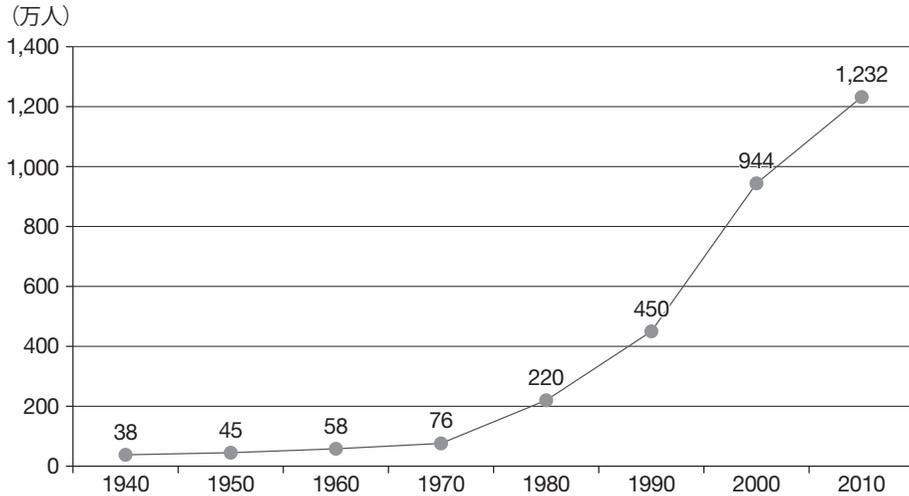
メキシコから米国への人の移動は、20世紀を通じてさまざまな理由から引き起こされてきたが、1990年頃から2008年のリーマンショックまでのメキシコ系移民の増加は、1970年から続く、20世紀に入って3度目にして最大の移民の波であった（三吉 [2014: 44]）。1970年に76万人だったメキシコ生まれの人口は、1980年に約220万人とほぼ3倍に増え、1990年には450万人へと、80年代を通して再び倍増した（図1）。20年間でほぼ6倍に増えたことになる。

移民の流れがさらに加速したのが、1990年代である。2000年に米国のメキシコ生まれの人口は944万人となり、2002年には1042.6万人と、ついに1000万人を突破した。これはメキシコの人口の約1割にあたる数字である。その後も、2008年秋のリーマンショックまでは移民の数は増え続けたが、2009年の1256万人をピークに、減少に転じている（図2）。

### 2 移民を引き起こしたマクロ経済要因

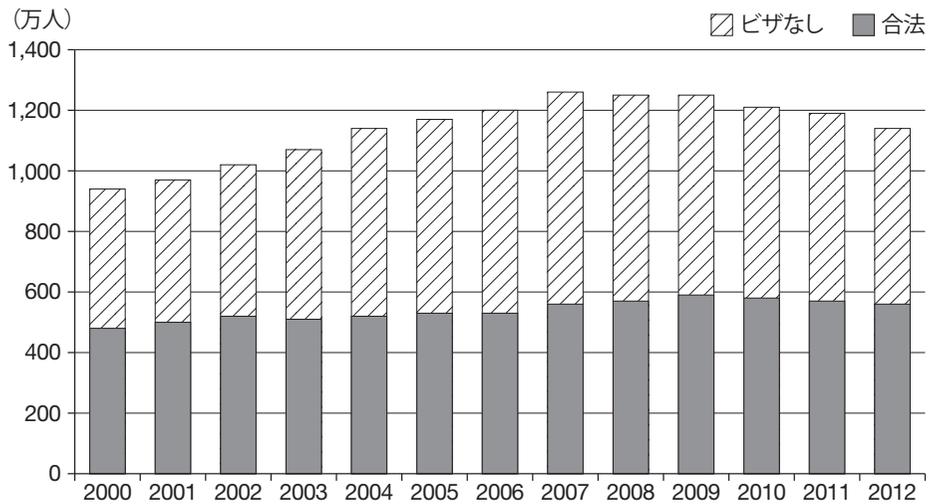
この1990年以降の移民の急激な増加について興味深いことは、この現象が、当時のサリナス大統領（Carlos Salinas de Gortari）の意図に逆行して起こったという事実である。1982年の債務危機以来の経済停滞を立て直そうとしていたサリナスは、北米自由貿易協定（NAFTA）によってメキシコ国内に雇用を創出し、労働力の米国への移動、つまりはメキシコ離れを食い止めようとしていた<sup>5)</sup>。皮肉なことに、サリナス大統領の意思に

図1 米国に住むメキシコ生まれの人口（1940～2010年）



(出所) Passel et al. [2012: Appendix Table A1] をもとに筆者作成

図2 米国に住むメキシコ生まれの人口（2000～2012年）



(出所) Passel et al. [2012: Appendix, Table A3]; Brown and Patten [2014: Table 4] をもとに筆者作成

反して、1990年からの10年間にメキシコから米国への移民は急増したのである。

その原因の一つはもちろん1994年末の通貨危機とその後の不況、つまりサリナスの政策の失敗であるが、もう一つの見方として、移民の増加は

そもそも（メキシコの場合 NAFTA 締結に象徴される）新自由主義の帰結である、と指摘する論者もいる。サッセンは、途上国から先進国への移民は必ずしも経済格差によって起きるのではなく、海外からの直接投資によって伝統的な生産形態が変

化し、新しい産業構造に吸収されない余剰労働力が発生するためであると述べている。伝統的な農村社会が農業の貿易自由化によって崩壊し、農家の働き手が仕事を失ったとしても、国境地帯のマキラドーラに代表されるような新しい産業は、若い（とくに女性の）労働力を必要とするため、こうした離農民たちの新たな職場にはならない。彼らにとって働きやすいのはむしろ、アメリカの農業現場であるはずだ、とサッセンは指摘する（Sassen [1988: 17-21]）。

メキシコで長年調査を行ってきたヘルマンも、NAFTAが農村に与えた影響を重視する。NAFTA締結の準備の過程で、メキシコ政府は土地の共有制度エヒードを解体すると同時に、農業の三国間の自由競争に向けて補助金を削減するなど、農家にとって非常に厳しい措置をとった。メキシコ国内の都市の労働市場はすでに飽和していたため、彼らは米国に向かわざるを得なかった、というのが、ヘルマンによるこの時期の移民の増加の説明である（Hellman [2008: 3-5]）。

このように、1990年代以降の大規模な移民という現象は、マクロ経済の面からは、農村の構造変化という要因によって説明することができる。

### 3 移民のコストと社会資本

こうしたマクロレベルの要因に加えて、移住者の視点からみた移民にかかるコストについて、簡単に述べておきたい。まず、この頃にはすでに家族や友人が米国に住んでいる者も多く、そうしたつてをたどり、場合によっては彼らに渡航費用を借りて、米国に渡ることができた。この渡航費用というのはもちろん、単純な旅費ではなく不法入国のあっせん料であるが、1990年代は100ドルのオーダー、2000年代半ばには2000～3000ドル程度だったとみられる<sup>(6)</sup>。メキシコの物価を考え

ればそれなりに高額ではあるとはいえ、リーマンショック前の景気がよかった頃は、人から借りられる、そして一定期間働けばきちんと返済できる程度の額だったのである。

さらに、米国に到着した移民はこうした先行する知り合いのところに泊まり、仕事も世話してもらい、言語の面でも、仲間や職場の同僚たちとの会話は、多くの場合スペイン語でことが足り、必要な場合には英語ができる者に通訳してもらえばよい。メキシコから米国にやってきて、まったく知らない土地に一人で放り出されるのに比べ、経済的にも心理的にも移住のコストはずっと低くなることがわかるだろう。こうした社会的なネットワーク、とくにメキシコの故郷の村と移住先の結びつきのことを、マッシーらは「社会資本」と呼び、移民増加の重要な要因だと指摘している（Massey et al. [2002: 18-21]）。

移民の絶対数の増加にともない、メキシコ系住民の出身地ならびに移住先は地理的にも拡大した。米国国内での居住地は、従来の南西部プラス大都市圏から全国へと拡大し、またメキシコ国内の移民送り出し地域も、従来の北中部からメキシコ全土へと広がった（Pew Hispanic Center [2005]; González Barrera and López [2013: Appendix A]）。チアパスやユカタンなど、南部の州の先住民村落出身者も増え、ときにはスペイン語を話さない移民さえ報告されるようになったのである（Fox and Rivera Salgado [2004]; Burke [2004]）。職種についても、メキシコ系移民が従事する仕事は、ブラセーロ計画に象徴されるような農場での労働から、1980年代後半にはすでに、都市におけるサービス業あるいは建設業にシフトしていった（Cornelius [1992: 181]）。

本節では、移民の急増という現象に関する統計データを概観し、その社会的・経済的メカニズム

について、マクロとミクロの両面から分析した先行研究を紹介してきた。次節では、筆者が調査を行っているユカタン州ペト市から、カリフォルニア州北部サンラファエル市への移民の事例について扱い、こうしたプロセスの背後で、どのような個人の行動があったのか、その実例をみていく。

## Ⅱ ユカタンからカリフォルニアへ

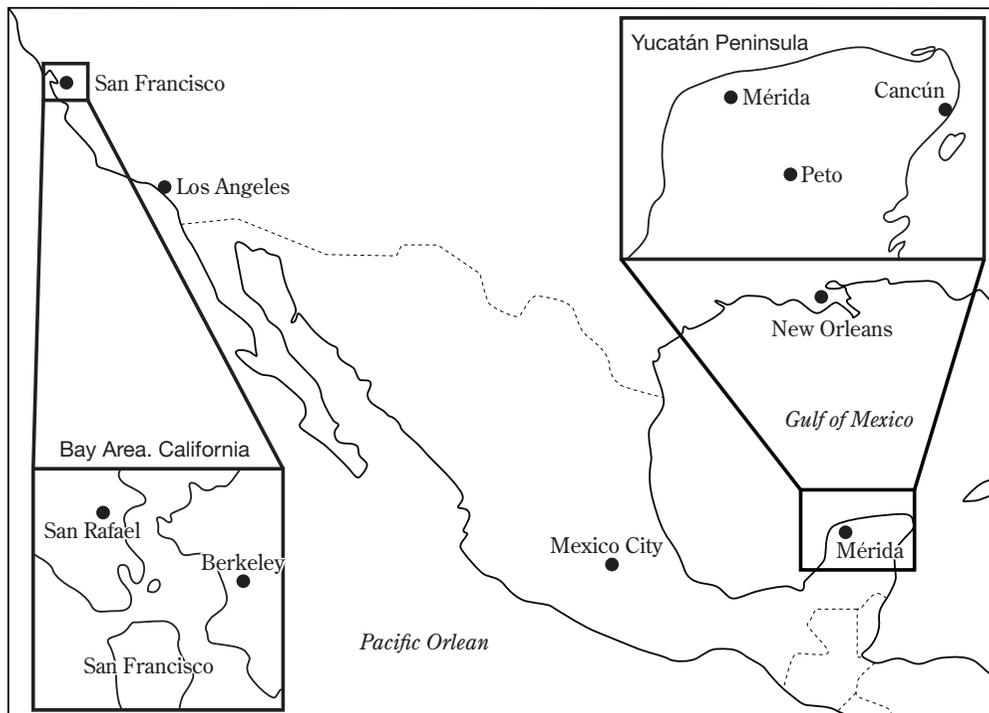
### 1 ユカタン州ペト市とカリフォルニア州サンラファエル市

ユカタン州はその名のとおりユカタン半島に位置し、米国との国境とは最も遠く離れた位置にある。このユカタン州やチャパス州からも、近年は移民が多く米国に渡っている（Adler [2003] ;

Adelson [2004] ; Burke [2004] ; Lewin Fischer [2012]）。ここでは筆者が2000年から断続的に調査をしている、ユカタン州ペト市から北カリフォルニア・マリナー・カウンティのサンラファエル市の移民の事例を紹介する。

ペトはユカタン州の南部にある、州のなかでは中規模程度の町で、周辺の村（comisarias）を合わせて人口20000人程度の自治体である。今ではもう廃線となっているが、州都メリダからの鉄道の終着点であり、20世紀前半の一時期には、ここよりさらに南、現在のキンタナ・ロー州から運ばれてくる物資の中継点として、そして天然ゴム採集の基地としてうろつた。しかし、それ以外にはさしたる産業もなく、ゴム・ブームの終了後は寂れる一方となっていた。もちろん、州のなか

図3 ユカタン=カリフォルニア移民地図



（出所）Watanabe [2008: 50] を一部改変

では比較的肥沃な土地を生かそうと、農業振興のための補助金も投入されたが、その資金のほとんどは政治家の懐に入り、本来の目的のために活用されることはなかった。

筆者がこの町を訪れたのは、2000年の大統領選挙の直前であり、目的は選挙の実施状況を調査するためであった。町の人々にインタビューをするうち、小さな雑貨店に入ると、そこにはなぜかゴールデンゲートブリッジの写真が飾ってあった。女主人に由来を聞くと、サンフランシスコ近郊に移住した彼女の息子たちのものだという。

このベトの町を何度か訪れるうち、この町の出身者の多くが、カリフォルニア州北部のサンラファエル市に移住していることがわかった。サンラファエルは、サンフランシスコからゴールデンゲートブリッジを渡った先のマリン・カウンティにあり、比較的裕福な人々が多く住む土地として知られている。

なぜそのような土地に、多くの移民が住んでいるのだろうか。その問いに答える前に、サンラファエルの上空から撮られた写真を見てみよう。まず、写真の中心を流れる川（San Rafael Creek）が、町を分断している様子が見て取れる。この写真の正面奥が町の中心部であり、右側は一戸建ての住宅が建ち並ぶ丘陵地帯である。

そして地図の左下、中心部および住宅街から、川によって隔てられた部分がある。キャナル地区（Canal District）と呼ばれるこの地区が、ヒスパニック系住民の居住区となっているのである。右側の丘には、一戸建て住宅とおぼしき比較的小さい建物が並んでいるのに対し、この地区には工場や集合住宅と思われる大きな建物が多いのが、見て取れるだろう。筆者はこの地を調査で訪れたことがあるが、ここはメキシコかと見まがうばかりで、歩いているのは褐色の肌の人々がほとんどで、聞こえてくるのはスペイン語であった。さらに付

図4 サンラファエル市キャナル地区・航空写真



(出所) Wikipedia ([http://ja.wikipedia.org/wiki/サンラフェル\\_\(カリフォルニア州\)](http://ja.wikipedia.org/wiki/サンラフェル_(カリフォルニア州)))  
2015年4月13日。

け加えれば、写真の右下部分、3列に並んで係留されているヨットが、この地区の経済レベルの高さを物語っている（関心のある方は、Google Mapの航空写真などで確認されたい）。

以上から、サンラファエルに移民が増えた理由は、次のようにまとめることができるだろう。この町は裕福な住民が多く、都市におけるサービス業の雇用機会がふんだんにあった。それに加えて、このような、いわゆる人種による住み分けに都合のよい地形が存在した。そのためこの町には、メキシコや中米出身者にとって、ある意味とても働きやすく住みやすい環境が整っていたのである。

## 2 移民ネットワーク1：最初の移民たち

ベトから米国への移民は、その大規模な流れが一人の人物から始まったという点で、そしてまたそのことが特定できるという意味において、特異な事例である。ここでは『マヤブからカリフォルニアへのエクソダス』(Rodríguez Sabido [n.d.])という本をもとに、移住がどのように始まったのかを検証していく<sup>(7)</sup>。なお、マヤブ(Mayab)とはマヤ語で現在のユカタン地方を指す言葉である。

### 2.1 ゴウイング神父とサントス

1970年代半ば、メキシコ人の司祭がいなかったベトの教区には、米国に本拠を置くカトリック団体、マリクノール会から司祭が派遣されていた。このアイルランド人神父、トーマス・ゴウイング(Thomas Gowing)は、ボクシングやバスケットボールなどのスポーツを通じて町の若者たちと親しくなった。1979年の中頃、彼がカリフォルニア州ベイエリアのサンタロサに配置換えになり、ベトを離れることが決まった頃、「サントス」というあだ名の若者の一人が、われわれもカリフォルニアに連れて行って欲しくないか、と神父に持ち

かけた。神父は答えを保留したが、ベトを離れてから数か月して、彼からかなりの額の送金があり、5人分の旅費を用意したから自分のほかに4人を連れてこい、との手紙が届く。

ベトからの最初の移民となる彼ら5人は、メキシコシティー経由でティファナに向かい、司祭がすでに話を付けてあったポジェーロ(Pollero: 密入国請負人)を見つけ、徒歩で国境の反対側に渡った。ゴウイング司祭は国境近くのサンタアナで彼らを待っていて、そのまま任地に近い北カリフォルニア・セバストポリまで彼らを連れて行ったのである。

サントスは最初、果物の摘み取りの仕事をしてしたが、季節労働では十分に稼げないため、鋳物関係の仕事に就いた。その後、彼は司祭の助けで家族(妻と娘)を呼び寄せ、そのうちに2人目の娘が生まれることになるが、娘の出生登録によって移民局に目をつけられ、移民局に拘束された。このとき、ほかにも何人かのベト出身者が移民局に捕まったが、移民局のねらいは司祭だろうと考えた彼らは、マヤ語で口裏を合わせ、ゴウイング神父のことは絶対に口にすまいと示し合わせた。彼らはその後、不可解にも釈放されたが、自分たちを泳がせておいて捜査を続けるつもりだろうと考えたサントスは、結局1年半米国にいただけでベトに戻るようになった。

### 2.2 サンラファエルへ

最初にサンラファエルにたどり着いたのは、ルベン・ゴンサレス=カマラである。彼はサントスよりも若く、1980年に移民したときは16歳だった。ベトに再びやってきたゴウイング神父から、ビザやパスポートの費用、そして飛行機代としてかなりの額のお金を渡されたが、長く無計画な旅の末そのお金を使い果たし、結局ビザも取らないままカリフォルニアに密入国した。その後農場で

仕事を得るが、英語ができなかったため、安定した仕事も見つからないまま3年間を過ごしたが、あるとき神父やほかの仲間とサンフランシスコの観光地、フィッシャーマンズワープに行ったときに、偶然別のペト出身者と出会い、彼らの紹介でレストランに勤めるようになった。それから暮らし向きがよくなり、同じチェーンのレストランのサンラファエル店に勤めることになって、当時はほとんどヒスパニックのいなかった、この町に引っ越したのである。レストランでは人手が恒常的に不足しており、ほかにも誰か働ける人間はいないかと経営者に聞かれたルベンは、神父のネットワークを通して、多くのペト出身者に仕事を紹介したのである。こうしてサンラファエルにはペト出身者が増え、この地名は彼らにとって米国の代名詞のような存在になっていった。

仕事のないペトの村にいるよりもカリフォルニアに出稼ぎに來い、という一人の神父の「善意」で、はじめて5人の若者が国境を越えたのが1980年、それから20数年後には（一説によれば）5000人ともいわれるこの町出身の人々が、故郷を遠く離れて、カリフォルニアで暮らすようになったのである。

### 3 移民ネットワーク2：移民のコミュニティとマヤ文化活動

こうして生まれたサンラファエルのペト出身者コミュニティは、2000年代の半ば、さまざまな文化的・社会的活動を行っていた。ここでは2人の移民の活動を通して、彼らのコミュニティ活動の一端を紹介したい。

#### 3.1 フェリペ・タピア

2004年9月、サンフランシスコ美術館でマヤ文化についての展覧会が催された。この展覧会の

コンセプトの一つは、考古学・歴史としてのマヤと、現在のマヤをつなぐことであり、「現在のマヤ」を代表する人々として、ペト出身者を含むカリフォルニア在住のマヤの人々が、伝統的な踊りを披露するなどの形で展覧会に参加した(Adelson [2004])。フェリペ・タピアは参加者の一人で、サンラファエルでマヤ語のラジオ放送のアナウンサーをしていることでも知られていた。

2006年に筆者は彼とコンタクトを取り、サンラファエルに彼を訪ねた。放送は、サンラファエル高校の放送室を借りて行われており、周辺の5つの町に届いているのだという。彼は隣町サンアンセルモのモールにある、イラン人の経営するアイスクリーム屋で働いていたが、それ以前はペトに家を建てるため、他の2つの仕事をかけもちしていた。移住したのは高校を出てすぐの2000年。帰国するまで一度もペトに里帰りすることはなかった。

フェリペは米国に来て初めて、自分がマヤであるということ、そしてマヤの伝統の素晴らしさに気づいたといい、ペトの同郷者とのグループを作り、踊りを中心にさまざまな文化活動を行った。この活動がカリフォルニア大学バークレー校にいた研究者の目にとまり、その後フェリペは彼女のプロジェクトに協力したり、共著の論文を書くなど(Hawkins and Tapia [2008])、ビザを持たないままさまざまな分野で活躍することになる。彼は2008年の暮れにメキシコに戻り、現在はカンクンと並ぶリゾートのプラヤ・デル・カルメンで働きながら、週末にはペトに戻って、先住民振興局(Comisión Nacional para el Desarrollo de los Pueblos Indígenas)の支援する地元のマヤ語放送局XEPETでアナウンサーをするなど、積極的にコミュニティ活動を行っている。

### 3.2 マチエテ

2007年の暮れ、筆者はペトを訪ねた。クリスマスから年末にかけて祭があるため、多くの移民が帰ってくる時期だと聞いていたからである。クリスマス・イブの夜、前述の本の著者であり、政治・移民両方でのインフォーマントとしてお世話になっているロドリゲス氏とともに、ペト出身の移民のなかでも「マチエテ（仮名）」のあだ名でよく知られている、サンラファエルから一時帰国中の人物に会いに行くことになり、氏の自宅を訪ねた。ユカタンの田舎では珍しい二階建ての家の前庭には、大きなサンタクロースと雪だるまが飾られ、経済的な成功を物語っていた。

「マチエテ」は1985年に18才で米国に移民した。渡米後すぐは農業や林業関係の仕事に就き、現在では庭師として働いている。1986年の移民法改正時、本来なら居住年数が足りなくて取れなかったはずの米国の永住権を八方手を尽くして取得し、一時はそれを利用してメキシコとの間を往復して物資を運んだり、他の移民の送金を請け負ったり（つまり地下銀行）など、本業以外にもさまざまな活動をしてきたそうである。

彼は、サンラファエルでもいくつかの団体を中心となって運営してきた。野球が好きで、メキシコ系住民の草野球リーグを組織していたほか、踊りなどのマヤ文化の実践を目標とする「チャンカハル（Chan Kahal: マヤ語で「小さな村」の意味）」というペト出身者の同郷者団体でも中心的な役割を担っていた。2004年にはこの団体を通じて資金を集め、3x1プログラム（Programa Tres por Uno）という政府のプログラムに応募し、町に救急車を寄付した<sup>(8)</sup>。当時ペトには大きな病院がなかったため、彼の親も含め、適切な治療が受けられれば回復したであろう、脳梗塞や心臓発作での死者が多かったためである。

なお、この3x1プログラムを通じた地元への還元は、残念ながらうまくいかなかったことを付け加えなければならない。たとえば、チャンカハルが寄付した救急車はほどなくして事故に遭ったが、管理体制がずさんだったために修理費用がどこからも出ず、長らくそのまま放置されていた。この時期ペトでは、同じプログラムを通じて老人ホームが建設されたが、こちらに至っては一度もその門が開かれることはなかった。故郷を離れた移民が、自分ではできない年老いた両親の世話をするために考案されたプロジェクトであったが、職員の雇用など自治体のサポート体制が整わず、また活動の中心となった移民団体のリーダーが若くして亡くなったこともあって、建物ができただけで終わってしまったのである（Watanabe [2008: 50-55]）。

この事例からもわかるように、移民と故郷のネットワークは、とくにそこに行政がからむ場合、さまざまな問題を抱えることとなった。とはいえ、2000年代半ばの好況期には、ビザを持たない移民にとってさえ、米国内でかなり自由に文化的活動ができるような雰囲気があった。こうした状況は、2008年のリーマンショック後の経済危機の影響で、大きく変わることになる。

## Ⅲ リーマンショックとオバマ移民制度改革は移民にどんな影響を及ぼしたのか

### 1 リーマンショックの影響

2008年のリーマンショック以降、移民たちは経済的に厳しい状況に置かれるようになった。筆者が町を訪ねた2007年のクリスマス以降、ペトの年末は移民の帰省という性格を失い、徐々に静かなものになっていった。リーマンショック以前は、ビザなし移民であっても年末に帰郷し、故郷

で数週間を過ごしてから再び米国に向かう移民も多かったが、不況と国境警備の強化、そして不法入国あっせん料の高騰により、そうした移動は実質的に不可能となり、また永住権を持つ移民たちにとっても、経済的理由から、帰郷はそれほど容易なものではなくなったためである。

I節の図2に示した2000年以降の移民の数の推移を見ると、米国在住のメキシコ人の数は、リーマンショック後もすぐに急減したわけではないことがわかる。2009年の時点ではまだ、米国において景気回復を待った方がよいとの判断から、反対にメキシコの家族が米国内で失業中の移民に送金をするといった報道が出ていたが (*New York Times*, November 16, 2009), 2012年以降は、移民の帰郷を伝える記事が目立つようになった (*New York Times*, January 5, 2012; September 21, 2013)。ペトの例でも、前述のフェリペら帰国する移民が増えたが、彼のケースをみてもわかるように、ペトで仕事を見つけるのは容易ではなく、再びカリブ海側のリゾート地に移住する人々も多いという。

Pew Research Centerのパッセルらの報告によれば、メキシコ生まれの米国在住者の数は2010年、ついに減少に転じた (Passel et al. [2012])。彼らはその理由として、米国の景気の悪化以外にもいくつかの要因を挙げているが、とくに重要なものとして、国境警備と強制送還の強化に加え、国境地帯で活動するマフィアによる誘拐や、麻薬の運搬の強制など、国境越えにさまざまな危険がともなうようになったことを指摘している。

## 2 オバマ大統領の移民制度改革

米国のオバマ大統領は2014年11月20日、2013年に上院を通過した移民法改正が、下院で採決さえされないことへの抗議とともに、移民制度の改革を進めるための大統領令の内容を発表し

た。大統領のウェブサイトをもとにその骨子を簡潔にまとめれば、5年以上米国に住んでいて、米国の市民権あるいは滞在許可を得ている子供のいる両親に対し、本人からの申し出があった場合、犯罪歴の有無などのバックグラウンド・チェックを受け、税金と罰金を納めることを条件に、強制送還を行わない、ということになる<sup>(9)</sup>。これと同時に、2012年に導入された、幼少時に米国にやってきた若者に対する在留許可プログラム (Deferred Action for Childhood Arrivals: DACA) の拡大も計画されているほか、国境警備や強制送還のいっそうの強化、そして正規の移民の受け入れ拡大などがうたわれている。

この計画によって期待される効果については、大統領自身のウェブサイトに経済活性化や税収増の期待が述べられているほか、実際に影響を受けると予想される人数、そしてどの国の出身者がより影響を受けるかなどについて、PEW Research Centerがさまざまな試算を発表している (Krogstad [2014]; Patten [2014])。

この制度改革が実際にどのような効果をもたらすかは未知数であり、また本稿を執筆している2015年4月の時点で、26の州が大統領令の差し止めを求めており、そもそも改革が実行に移されるかどうかすらも、司法当局の判断にゆだねられている状況だが (*New York Times*, April 17, 2015), これに関連していくつかの点を指摘しておきたい。

まず、こうしたビザなし移民に対する歩み寄りというべき政策は、ほかにもさまざまな形で行われているということである。たとえばカリフォルニア州では、2015年1月にビザなし移民に対する免許証の交付が始まり、申請者が殺到した陸運局が大混雑したほか、ペーパーテストのための道路交通法の講習が、各地 (メキシコ領事館も含む) で行われた<sup>(10)</sup>。

また、ロサンゼルス在住でユカタン同郷者会連合 (Federación de Clubes Yucatecos) を組織したサラ・サパタ＝ミハレス女史によれば、実際に移民たちがこの法改正によって払うことになる金額 (政府に納める申請料+税金+罰金だけでなく、必要な書類を書いてもらうための弁護士あるいは移民支援団体への謝礼など。夫婦の場合は当然2人分となる。) がかなりの額に上ること、そして申請が却下されるリスク、あるいは自らがビザなし移民であることを明かすリスクを考えると、どの程度の応募があるかはわからないという<sup>(11)</sup>。

共和党支持者を中心に、移民制度改革に対する根強い反対があり、それこそオバマ大統領の後継が誰になるかもわからない、といった不確定要因も考慮に入れなければならない移民たちにとって、このプログラムに応募するかどうかは簡単に判断できることではない、というのは確かであろう。

## むすび

本稿では、1970年代以降のメキシコから米国への移民の動向を概観したうえで、筆者が調査を行ってきたユカタン州ペト市と、ペトからの移民の移住先であるカリフォルニア州サンラファエル市の事例を紹介してきた。これはもちろん一つの事例に過ぎないが、I節で触れたような統計的な数字や学問的な理論の背景として、こうした生身の移民の人々の人生があるということを読者の方々に認識してもらえれば、そして彼らの個人としての活動と生の声を伝えることによって、移民という現象への理解が多少なりとも深まれば、本稿は一定の目的を果たしたといえるだろう。最後に触れたオバマ大統領の移民法改革については、まだまだ不確実な要素が多いが、少なくとも当事者である移民たちの間で、すでにさまざまな対応が始まっており、それは必ずしも政策立案

者の予想通りにはならないであろうと指摘して、本稿の結びとする。

## 注

- (1) <http://latino.foxnews.com/latino/entertainment/2015/02/23/birdman-soars-at-oscars-director-inarritu-celebrates-mexicans-on-both-sides/> 2015年3月26日
- (2) ここに描写したメキシコからの移民たちの働く様子の多く (カリフォルニアの農場と鶏肉加工工場以外の例) は、筆者が実際に目にしたり、当事者から直接話を聞いたりしたものである。なお、米国の鶏肉加工工場で働く移民労働者の様子については、ストリフラー (Striffler [2005]) の研究が詳しい。
- (3) アメリカでは、このいわゆる不法移民の呼称として、illegal, undocumented, unauthorizedなどのいい方がある。筆者はかつて別の論文で「ビザなし移民」という言葉を使ったが (渡辺 [2006])、本稿では一般的に使われている不法移民という用語を使う。
- (4) メキシコ国立地理統計局 (INEGI) の2010年国勢調査のデータ (<http://www.inegi.org.mx/est/contenidos/proyectos/ccpv/cpv2010/>) 2015年4月19日。
- (5) 1990年、サリナス大統領はアメリカ人記者との懇談のなかで以下のように述べた。「問題は、メキシコ人にどこで働くのが望ましいのか、メキシコなのか、それともアメリカなのか、ということだ。私は労働力より製品の輸出が好ましいと考える」 (Moffet [1990])
- (6) II節で扱うペト出身の移民たちの回顧録のなかで、1985年に移民した人物が国境でタクシーの運転手に3人分の密入国あっせん料として350ドルを支払い、全員でトランクに入って国境を越えた、との証言がある (Rodríguez [n.d.: 57])。マッシーらの調査では、1990年時点でのあっせん料の平均は150ドルだったのに対し、1998年には525ドルにまで高騰した (Massey et al. [2002: 129-130])。この価格上昇はその後も続いた模様で、ヒューストンでユカタン出身者のコミュニティを調査したア

ドラーは、2002年頃の国境通過料の相場は1800ドル程度だったと記している (Adler [2003: 48])。筆者自身も2004年頃、コネチカット州のメキシコ人の経営する雑貨屋で、こうした密入国あっせん料について会話を交わしたことがあり、そのときは3000ドルほどかかると聞いた (詳しくは、渡辺 [2010: 12] を参照されたい)。

- (7) 地元在住のアルトゥーロ・ロドリゲス氏が制作し、2008～2009年頃に発行されたこの本は、2005年から2008年にかけてロドリゲス氏自身によってペトとサンラファエルの両方で行われた、この町出身の41人の移民 (あるいは移民経験者) たちのインタビューからなる。インタビューでは、彼らが移民した経緯、国境越えの様子、アメリカでどのように仕事を見つけ、働いてきたか、そして自分の家族ならびに交流関係など、外部の学者やジャーナリストにはなかなか聞けないような話が明かされている。
- (8) この3x1プログラムは、出身地への移民の寄付を募るために作られた、マッチングファンドプログラムである。移民が故郷の町のインフラ整備を希望して一定額の資金を提供すると、連邦政府・州政府・自治体がそれぞれ同額を支出し、結果的に寄付金の4倍の資金がプロジェクトに投じられる。
- (9) オバマ大統領公式ウェブサイト (www.barackobama.com/immigration-reform/) 2015年4月5日。
- (10) たとえばロサンゼルス・メキシコ領事館では、2015年3月までに9回の講習会が開催された。(http://consulmex.sre.gob.mx/losangeles/index.php/component/content/article/448) 2015年4月19日。
- (11) 筆者によるインタビュー、ロサンゼルス、2015年3月3日。

## 参考文献

- <日本語文献>  
 三吉美加 [2014] 『米国のラティーノ』 大学教育出版。  
 渡辺 暁 [2006] 「書評論文 アメリカ合衆国のメキシコ系移民社会」 (『イベロアメリカ研究』 第28巻 第1号 73-86ページ)。  
 —— [2010] 「アメリカのメキシコ系移民—国境を越

えた市民社会を生きる—」 (『津田塾大学国際関係研究所報』 第45号 9-17ページ)。

## <外国語文献>

- Adelson, Naomi [2004] “El pasado se conecta con el presente,” *Masiosare (La Jornada)* 356.
- Brown, Anna and Eileen Patten [2014] “Statistical Portrait of the Foreign-Born Population in the United States, 2012,” Pew Research Center.
- Burke, Garance [2004] “Yucatecos and Chiapanecos in San Francisco: Mayan Immigrants Form New Communities,” Fox and Rivera Salgado, *Indigenous Mexican Migrants in the United States*, pp. 343-354.
- Cornelius, Wayne A. [1992] “From Sojourners to Settlers: The Changing Profile of Mexican Immigration to the United States,” *U.S.-Mexico Relations: Labor Market Interdependence*, edited by Jorge A. Bustamante, Clark W. Reynolds, and Raúl A. Hinojosa Ojeda, Stanford, CA: Stanford University Press, pp. 155-195.
- Ennis, Sharon R., Merarys Ríos-Vargas, and Nora G. Albert [2011] “The Hispanic Population: 2010,” U. S. Census Bureau, C2010BR-04.
- Fox, Jonathan and Gaspar Rivera Salgado, eds. [2004] *Indigenous Mexican Migrants in the United States*. La Jolla: Center for US-Mexican Studies, Center for Comparative Immigration Studies, University of California, San Diego.
- Gonzalez-Barrera, Ana and Mark Hugo López [2013] “A Demographic Portrait of Mexican-Origin Hispanics in the United States,” Pew Research Center.
- Hawkins, Isabel and Felipe Tapia [2008] “The Living Astronomy and People of the Mayan World Today: Engaging Hispanic Populations in Science,” EPO and a Changing World: Creating Linkages an Expanding Partnerships, ASP Conference Series Vol.389.
- Hellman, Judith Adler [2008] *The World of Mexican Migrants: The Rock and the Hard Place*, New York: New Press.
- Krogstad, Jens Manuel [2014] “Obama’s Expected

- Immigration Action: How Many Would Be Affected?," Pew Research Center.
- Krogstad, Jens Manuel and Jeffrey S. Passel [2014] "5 facts about illegal immigration in the U.S.," Pew Research Center.
- Lewin Fischer, Pedro [2014] *Las que se quedan : Tendencias y testimonios de migración interna e internacional en Yucatán*, México: Instituto Nacional de la Mujer, Gobierno del Estado de Yucatán.
- Moffett, Matt [1990] "Moves by Mexico Toward U.S. Free-Trade Pact Mean Salinas Must Walk Domestic Tightrope," *Wall Street Journal*, March 30.
- Passel, Jeffrey, D'Vera Cohn and Ana Gonzalez-Barrera [2012] "Net Migration from Mexico Falls to Zero-and Perhaps Less," Pew Research Center.
- Patten, Eileen [2014] "How Obama's executive action will impact immigrants, by birth country," Pew Research Center.
- Pew Hispanic Center [2005] "Hispanics: A People in Motion," Pew Hispanic Center.
- Rodríguez Sabido, Luis Arturo [n.d.] *Exodo del Mayab a California*. Mérida: Gobierno del Estado de Yucatán, Instituto de Cultura de Yucatán, Conaculta, Pacmyc 2006.
- Sassen, Saskia. [1988] *The Mobility of Labor and Capital: A Study in International Investment and Labor Flow*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Striffler, Steve [2005] *Chicken: The Dangerous Transformation of America's Favorite Food*, New Haven: Yale University Press.
- Watanabe, Akira [2008] "Expanding Mexican migrant society and the Mexican government," *Anales de estudios latinoamericanos* (『ラテンアメリカ研究年報』), Vol. 28, pp. 31-63.

(わたなべ・あきら／山梨大学准教授)